

瀬川澄子さんの東京大空襲の体験談ビデオとインタビュー要旨

ビデオ：

空襲はいつも夜中にあつたので当時は洋服を着て寝ていた。その夜も真夜中過ぎに空襲警報が鳴り、家族と一緒に防空壕の中に避難していたところ、そこら中に落ちてきた焼夷弾の1つが防空壕の真ん中にななめ横から入ってきて、真っ暗だった中がパッと明るくなり燃え出した。皆ひとつしかない小さな戸口から逃げ出したが、一番奥にいた私はその火をどう超えたのかも覚えていない位が無我夢中で戸口まで行ったら転んでしまい、危機一髪のところを兄が引き出してくれた。家はすでに燃え盛っており、父と兄1人を除いた4人は墓地に逃げるよう父に指示された。上からも足元も火に囲まれ、多くの人が逃げ惑う中、墓地に向かおうとしたが、途中で誘導係に川の方に行くよう指示され、皆で川に向かった。もうすでに多くの人が集まっており、火が迫ってきたら川に入ろうと皆で話し合いつつ、一帯の火事でオレンジ色になっていた空や周囲を不安の中呆然と立って見ていた。やがて火事も燃え尽きて収まり夜が明けてきたので、皆で歩いて家に戻った。焼けた家の前で父と兄が、墓地に来なかったのでとても心配して待っていた。この時家族が皆無事だったことは幸いだったが、今でもこの恐ろしい経験は鮮明な記憶として残っている。

インタビュー：

1932年に生まれた。戦時中は、それが当たり前であり怖いとも思わず育っていた。小学校3年の時に太平洋戦争が始まった。

最初のころは、出征軍人が持参する「千人針」をつくる人が多くいた。「千里行って千里帰る」という言い伝えに基づき、木綿の布にトラの輪郭を点で描いたものを千人の異なる人が縫い留めの小さな球を糸で作った。家族、親類、近所の人や駅等の人通りの多いところで通行人に頼んだり、寅年の人は年齢数できるなど、皆真剣に信じて行った。

戦時中は英語やアメリカに関するものは禁止されたが、野球はアウトやセーフなどの言葉を無理やり日本語に直して行われていた。軍国主義一色で、戦争反対や文句を言うと憲兵に連行・投獄され、罰せられ、言論の弾圧があった。「欲しがりません、勝つまでは」「贅沢は敵」「鬼畜駆逐アメリカ」など多くの標語が流行り、人々は洗脳されていた。

東京の空襲が始まると子供たちは個人や集団で学童疎開した。私は疎開先で小学校を卒業し、中学に行くため東京に戻り、バッテリー工場になっていた中学で働くことになったが、空襲で焼け始業式もなくなった。姉は造幣工場で働いていた。

戦時中は「何々であります」などの軍隊の言葉遣いを教えられ使うように指示され、軍人勅語、宣戦詔勅、教育勅語を読まされた。

市民は本土決戦になった時には竹やりや銃剣で戦うように指導され、皆真剣に練習していた。戦時下大人たちは、日本軍が勝っているというニュースを信じるような環境下に置かれていた。米軍が飛行機で撒いたビラ(マリアナ情報という)を「拾うな、読むな」と言われていたが、皆チラ見をしていた。

家の焼失後は、焼け残った知人宅に短期間お世話になり、丹沢山近くに疎開先として予定していた住居の完成を待ち移転した。玉音放送はそこで聞いた。私は「戦争が終わってよかった」と思ったが、人々は「負けたのか」と茫然としていた。

進駐軍が来たら「女性は襲われる」と真剣に怯え、男装やわざと汚い格好をすることを考えていた。実際にはハワイアンやジャズ音楽がたくさん流れてきてほっとし、ジープがいっぱい走っていたが、あまりネガティブな印象は持たなかった。

家が焼失したので、しばらくは焼け残った大森の叔父の家からキリスト教系の私立中学に通った。新しい教科書がまだなかったので、戦中のものをGHQの検閲を受けて、教室で各自禁止部分を黒く塗りつぶしてから使った。

軍国モードが一掃され、開放感が全国に広がり、ガラッと雰囲気が変わった。

間もなくNHKラジオで夕方に毎日15分英会話の放送が始まった。「狸囃子」の曲に“Come, come, everybody”で始まる英語の歌詞に変えたテーマソングは誰でも知っているほどだった。衣食住全ての物資が不足し、GHQ物資GI用食料品が横流しされ、闇市や露店が焼け野原のあちこちに立ち、インフレがひどかったので、お金がないと生活は難しかったようだ。その中でカルメ焼き、ポン煎餅、重曹パンなどのお菓子は家で作れてとてもおいしかった。

兄4人の内上2人はフィリピンと中国の戦地に行った。終戦後フィリピンの収容所にいた兄から「問題なく暮らしている」という手紙が来た後、復員した。「敗戦近くになりますます武器もなく、ただ逃げ回るだけだった」と兄から聞いた。収容所での歌舞伎様の化粧と衣装を着た芝居の写真を見せてくれた。しかしフィリピンでマラリアにかかり帰国後透析が必要となり、それが原因で亡くなった。中国に行った兄は、帰国の船の中で栄養失調で亡くなった。

その他の家族や親せきは無事だったが、近所から広島に疎開した姉妹が被爆し、ひどい火傷の治療のためアメリカに送られたが、戻って来なかった。